

何のために「学び」「生きる」のか“志”を持って生き活きと生きる社会を ----- バッカーズ寺子屋塾長 木村 貴志

2018年5月7日 週刊「世界と日本」第2124号

<https://www.naigainews.jp/特設サイト/私の教育論チャンネル/>

「何のために学ぶのか」「何のために生きるのか」というテーマが、日本の教育の世界から遠ざけられて久しい。戦後の教育においてはテストのために懸命に目の前にある問題を解くことと、知識を暗記することが、「勉強」と同義になってしまった。先の大戦の前までは、「学は人たる所以を学ぶなり」（吉田松陰）というように、どうすれば立派な人間になれるのかを究めるために学問はあった。

四書の一つ『大学』に書かれているが如く、「大学の道は明德を明らかにするに在り」。

つまり、一人一人が天から授かった素晴らしい徳を明らかにし、それを発揮できるようになり、その立派な人物が、為政者として立派に国を治めていくことが学問の目的であった。

幕末の儒学者、佐藤一斎も次のように述べる。

「緊（きび）しく此の志を立てて以て之を求めば、薪を搬（はこ）び水を運ぶと雖（いえど）も、亦（また）是（こ）れ学の在る所なり。況（いわん）や書を読み理を窮（きわ）むるをや。志の立たざれば、終日読書に従事するとも、亦（また）唯（た）だ是れ閑事（かんじ）のみ。故に学を為すは志を立つるより尚（かみ）なるは莫（な）し。（聖賢たらんと志を立て、これを求めれば、たとえ、薪を運び、水を運んでも、そこに学問の道はあって、真理を自得することができるものだ。まして、書物を読み、物事の道理を窮めようと専念するからには、目的を達せないはずはない。しかし、志が立っていないければ、一日中本を読んでいても、それは無駄ごとに過ぎない。だから、学問をして、聖賢になろうとするには、志を立てるより大切なことはない）」（『言志録』）。

つまり、学問にも、人生にも「志」という名の「目的」がなければ、決して人は、生き活きと学び、生きることはできないのだ。教育者・森信三先生は次のように述べた。

「今日の学校教育では、生徒はいつまでも眠っている。ところが生徒たちの魂が眠っているとも気づかないで、色々なことを次から次へと、詰め込もうとする滑稽事をあえてしながら、しかもそれと気づかないのが、今日の教育界の実情です」そして、その原因を「教える側の教師に志が立っていないからである」と見た。

子ども時代に習慣となった、目的もなく、受け身でやらされる勉強が、仕事をやらされる受け身の大人をつくる。そこから脱し、主体的に考え、生きる人材を育むためには、「志あ

る教師による志の教育」「アクティブ・ラーナーによるアクティブ・ラーニング」が必要だ。

「志の教育」のポイントはいくつかある。これは私が塾長を務めるバッカーズ寺子屋・バッカーズ九州寺子屋（対象は10歳から15歳）の塾長を10年以上務めてきて、その実践の中からつかみ取ってきたことだ。

私は、過去に県立高校の教師も経験したが、学校教育の枠組みの中には決して気づくことのなかった教育実践方法だ。

例えば、「志の定義を明確に伝える」「話の聴き方を変える」「アウトプット（話す・書く）を前提としたインプット（聴く・読む）を鍛える」「目標設定の方法を学ぶ」「考え方・心の持ち方について学ぶ」「体験を言語化する」「レポートを書く力を高める」「原稿を読まないスピーチトレーニング」「良き大人たちとの出会い」「古今東西の先人の生き様に触れる」「多様性の中で切磋琢磨する」。

さまざまなテーマがある。卒塾生たちの多くは、「バッカーズ寺子屋では、学び方を学んだ」との感想を持つ。その全てをここに書くことはできないが、「志とは何か」ということについて、夢と志を比較しながら触れておきたい。

夢と志の第一の違いは、「考え抜き、信念に基づくか否か」ということだ。「私の夢ははかなく消えた」「そんな夢みたいなことを言ってどうする」とは言っても、「私の志ははかなく消えた」「そんな志みたいなことを言ってどうする」とは言わない。

つまり、夢は実現可能なものも指すが、思いつきや誇大妄想的なものをも含んでいる。夢の語源は、寝ているときに見る「寝目（いめ）」が、平安時代に「ゆめ」に転じたもので、元来、はかなさを比喩的に表す語であった。将来の希望を指す語として使われ始めたのは明治以降だという。

私たちの先達は、心が指し示す（心指す）方向にしっかりと歩いていくことを、「志」と言ったのだ。信念を持って何かを成し遂げようと思ひ、逆境を乗り越え、困難に打ち勝ってこそ「志」は実現していくものだ。

また、「志」には、「人々のため、社会のため」というニュアンスが含まれている。「私の夢は将来20億円の豪邸を建てて住むことだ」とは言えても、「私の志は将来20億円の豪邸を建てて住むことだ」とは言えない。

つまり、「夢」は私的なものであっても構わないが、「志」となれば、人々のため、社会のためといった「公的」なニュアンスを含む。人間は誰かの役に立とうとすることで、大きな力を発揮する。人々のために役立つことをミッションとし、わが喜びとする生き方は、自分にも他人にも大きなエネルギーを与えていく。

人生は大いに「志高く」生きた方が楽しい。もちろん、夢は夢として大切だ。なぜなら誇大妄想であろうと、私的なものでであろうと、「こんなことができたらいいな」と願い、実現を夢見てワクワクすることは人間の活力と進歩の源だからだ。

だが、大小を問わず、ぼんやりした夢を、実現のための努力もせず思い続けていても、無

為に時を過ごし、夢ははかなく消えるだけだ。夢の実現のためには、自己の適性を理解し、努力によって能力を磨き続ける必要がある。

また、実現のための具体的な目標を常に掲げねばならない。だから、具体的なビジョン（将来の構想・展望）をつくることが大切なのだ。

学びの成果は、卒業生たちが雄弁に物語っている。正味30日ほどの学びにもかかわらず、多くの場でリーダーシップを発揮し、さまざまな進路で活躍を始めている。私の志は、この寺子屋で培った「志の教育」を全国に広げ、子どもからお年寄りまで、全ての人が志を持って生き活きと生きる社会を実現することだ。

《きむら・たかし》

1962年、福岡県生まれ。企業勤務、高等学校教師などを経て、2006年「志の教育を創る」を理念に Vision&Education,Ltd.を設立。代表取締役を務める。バッカーズ寺子屋塾長。バッカーズ九州寺子屋塾長。福岡雙葉学園教育指導顧問。著書に『「志」の教科書』（産経新聞出版）などがある。